

卓 話

平成 24 年 4 月 17 日

『芸術の歴史』

野尻大名会員

芸術の歴史とは→社会の歴史・宗教の歴史

芸術とは→表現方法

古代（地中海美術・ギリシャ美術・ローマ美術・初期キリスト美術）→中世→近世（ルネサンス・バロック）→近代（新古典主義・ロマン主義・写実主義・印象主義）→20世紀美術（現代アート）

■中世

4世紀末にローマ帝国が東西に分裂。

コンスタンティノポリス（トルコ領イスタンブール）を首都とする東ローマ帝国（東ヨーロッパ）とその他（その時点ではまとまっていない西ヨーロッパ）で、独自の美術様式が発展する。

東西ヨーロッパのいずれも美術の発展には宗教が大きく関与しており、その主なモノはキリスト教美術であった。（バイブルの中に書かれた聖人の肖像が版画や教会堂のモザイク画）

特に西ヨーロッパでは、西暦1000年を機に教会堂の復興が盛んになり、11世紀初頭から素朴な信仰心に満ちた美術様式であるロマネスク美術が修道院を中心に発展した。この時期の絵画は文字が読めない人々にキリスト教を教える役割も持っていた。（フランス サン・サヴァン・シュル・ガルトン教会）

13世紀以降の美術はゴシック美術と呼ばれ、フランスを中心にヨーロッパ各国で発展した。ロマネスク美術に比べ、より自然な人体表現等が特徴的で、かつては修道士によって描かれていたが、この頃から専門の画家が誕生した。

■近世

《ルネサンス》

14世紀から16世紀にかけてイタリアを中心に古代ギリシャ、ローマの学芸・文化を復興しようという文化運動が起こった。建築・彫刻においても古代ギリシャ・ローマの作品を模範として制作が行なわれた。絵画においては当時、この時代を代表するような作品はあまり知られていないが、学問・科学の発展する時代にあって、遠近法や油彩画など革命的とも言える技法が確立された。

代表作：ボッティチェリのヴィーナスの誕生

ラファエッロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ

ルネサンス期の三大巨匠と呼ばれ、後の絵画に大きな影響を与えた。

16世紀後半には、ルネサンス様式の変容が際立つ。ティントレット、エル・グレコに代表されるマニエリスムがイタリアを中心に成立する。調和と均衡を特徴としたルネサンス的な理想からの逸脱が見られ、不均衡な構図、ねじれたような肉体表現、大胆にデフォルメされた遠近法が特徴である。その背景には、宗教改革、カトリック対プロテスタント、最終的にはプロテスタントに一定の制限の下で信仰の自由を認めて戦争は終結した。

自由主義神学「自由主義」の語は社会学・政治学用語からの仮借であり、神学分野では「歴史的・組織的な教理体系から自由に、個人の理知的判断に従って再解釈する」の意である。教義・教理の批判的研究である教義史を確立させた。

《バロック》

宗教改革は思考の解放であり、限りなく宗教観や理想主義に束縛されていた美術にも画家個人の解釈を反映できるようになった。理想主義的な宗教に対する批判的な表現もできるようになった。例えば、ルネサンス期には理想的な姿で描かれた聖人画が生活感あふれる庶民の姿で描かれたり（例：カラヴァッジオ「エマオの晩餐」）、バロック期には風景画、風俗画、静物画等の日常に根差したジャンルが確立し、現実世界への関心が高まった。

ディエゴ・ベラスケス、ルーベンス、レンブラント、フェルメール

■近代

新古典主義、ロマン主義、写実主義、印象主義と続く、西洋美術史の近代的伝統は、新古典主義と写実主義、ロマン主義と印象主義の影響関係が濃厚であり、対位法の如き呼応関係を証言するものであって、単純で連鎖的な歴史ではない。



《新古典主義》

フランス革命（1789年）によって貴族が没落し、ナポレオン・ボナパルトへ軍事的政治的経済的権力が集約され、これに接近したジャック＝ルイ・ダヴィッドの重用によって、絵画が再び活気付く。ギリシャ、ローマの科学・芸術を尊敬し、画家の制作の規範とした新古典主義が成立する。新古典主義絵画の特徴は、高い規範性と芸術性であって、直感的で理性的、技巧的であり、洗練されている。完成度が高く、荘重かつ堅固で的確な構図と明瞭で精確な描線が技法の特徴。とてもアカデミックで教育制度と強く結び付いた。初期フランドル絵画や初期ヴェネチア絵画に倣った油彩技法によって、鮮烈に印象付けられている。新古典主義は歴史画を中心に、人間理性や人文主義的教養の賛美や国家への忠誠などの根底的で重要なメッセージを具える。

《ロマン主義》

新古典主義とは対照的とされるのが、ドイツのカスパー・ダーヴィト・フリードリヒやフランスのウジェーヌ・ドラクロワに代表されるロマン主義の絵画である。18世紀末から19世紀半ばにかけて広まった様式で、叙情的表現とアモルファスな主題が特徴である。躍動的な構図を強烈な色彩を用いて演出する場合が多く、動感を線や面の強弱や連続性以上に、暴力的なまでの筆致によって表す傾向が強い。

《写実主義》

19世紀半ばには、現実を美化せずに知覚的な正確さを尊重し描くというステイトメントを用いる画家が現れた。ギュスターヴ・クールベである。クールベや、現実的な光景を特徴的な手法で描写するジャン＝フランソワ・ミレーらは写実主義と総称される。日常生活の情景など同時代の素朴で日常的なものが主題として選抜されている。

《印象主義》

形態の明確な描写よりも、それをつつむ光の変化や空気感など一瞬の印象を捉え、再現しようとしたのが、19世紀後半に現れた印象派である。エドゥアール・マネらによって創始されたこの革新的な様式は、官製のサロンに代表される伝統的な画家からは非難を浴びたが、新しい芸術運動として後の美術に多大な影響を与えた。代表的な画家として、クロード・モネ、エドガー・ドガ、ピエール＝オーギュスト・ルノワールなどがいる。

印象派では感覚的に捉えられていた色彩について、ジョルジュ・スーラ、ポール・シニャックは、色彩理論として体系化した新印象主義を展開した。絵具をあまり混ぜずに純色の小さな点を配置することで描いたため、点描主義とも呼ばれる。

ポール・セザンヌ、ポール・ゴーギャン、フィンセント・ファン・ゴッホの三人はポスト印象主義としてグルーピングされる。見たままの自然を描く従来の印象派とは異なり、これらを主観的表現として再構成した彼らの描き方は、20世紀美術に大きな影響を与えた。

《20世紀美術》

色の解放のフォーヴィスに対し、キュビズムは形の解放といえる。対象の形態を解体し、立方体で再構成するキュビズムはパブロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラックらによって推し進められた。

その他、20世紀初頭には、機械文明の価値観を芸術に取り込もうと試みた未来派、既成の秩序や常識を否定し無秩序や非理性を礼賛するダダイズム、純粋な抽象表現を目指したロシア構成主義など、様々な主義・様式があらわれた。伝統的な美術の枠組みが崩れ、新たな美術を構築しようと模索がなされたのである。このような動きを端的に示しているのが、マルセル・デュシャンの問題作「泉」（1917年）である。この作品は便器に偽名のサインを書いただけのものであり、美術とは何かという強烈な問いかけであった。

このような模索を経て形成された大きな潮流が抽象絵画とシュルレアリスムである。

抽象絵画は絶対絵画とも呼ばれる。目に見える現実を描写するのではなく、色彩と形態などの純粋な造形的な要素だけによる表現を目指した。この運動は1910年代にワシリー・カンディンスキー、ピエト・モンドリアンを中心にして始まった。テオ・ファン・ドースブルフ、モンドリアンらが1917年に創刊した雑誌「デ・スタイル」は抽象絵画運動の一大拠点としての役割を果たした。

シュルレアリスム（超現実派）はダダイズムを母体として、1924年にアンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム宣言」によって誕生した。精神の全的な解放と既成秩序の否定を唱え、創造における無意識の役割を重視した。代表的な画家にジョルジュ・デ・キリコ、ルネ・グリット、サルバドール・ダリらがいる。

ミニマル・アート（Minimal Art）は、視覚芸術におけるミニマリズム（Minimalism）であり、装飾的・説明的な部分をできるだけ削ぎ落とし、シンプルな形と色を使用して表現する彫刻や絵画で、1960年代を通じておもにアメリカ合衆国で展開した。先行する抽象表現主義を批判的に継承しつつ、抽象美術の純粋性を徹底的に突き詰めた。

フランクステラなど